

茨城教育研究所通信

第32号 2020年12月3日
発行 茨城教育研究所
〒310-0853 水戸市平須町 1-93
(茨城県高等学校教職員組合内)
TEL 029-305-3075 Fax 029-305-3137

コロナ禍のなかで

子どもたち、そして教育行政・医療行政

COVID-19のパンデミックは、世界で6000万人が感染し、140万人が死亡する状況(11月26日現在)になっていますが、日本でも感染拡大の第3波が発生し、毎日2000人前後の新規感染者が確認されています。それにも関わらず、「経済優先」でGoToキャンペーンが行われる中、学校は「3密」状態のまま授業や行事、部活動が続けられています。そして国の無為無策により生まれた医療現場からの悲鳴は、雑多なニュースにかき消されながらも、深刻さを増しているように見えます。

2月27日の安倍首相による突然の学校休業要請によって、要請にもかかわらず茨城県はもとより全国のほぼすべての学校が休校することになりました。子どもたち、親たち、先生たちなどすべての学校関係者を混乱に陥れました。

今号では、第I部で、3月以降の休業中の小学生の状況と、6月以降の再開後の特別支援学校の子どもの状況を取り上げました。第II部では、前号でも指摘しましたが、大井川知事による教育行政への介入を、「医師確保」政策の面から読み解きました。さらにCOVID-19における県と国の医療行政の失敗と挫折を分析しました。

第1部 コロナ禍と子どもたち

- | | | |
|-------------------------------------|------------|---|
| コロナ禍での子どもの生活——作文を読む | ……………石上徳千代 | 2 |
| あこがれのジャイアンと過ごす日々——うちのクラスの“こころのとも”たち | ……………小林秀行 | 6 |

第2部 COVID-19状況下で混迷する茨城県の医療行政と教育行政

- | | |
|--------------------------------|----|
| …………… | 14 |
| 1 「茨城県の医師確保」政策の一環としての医学部受験偏重方針 | |
| 2 知事が直接執行する教育行政 | |
| 3 COVID-19における県医療行政の失敗 | |
| 4 国の「クラスター対策」方針の挫折 | |
| 5 茨城県のCOVID-19関連医療行政の推移 | |

コロナ禍での子どもの生活 —— 作文を読む

茨城公立小学校 石上徳千代

Ⅰ はじめに 一斉休校から現在までの概況

私が勤務する小学校では、2020年3月2日（月）から臨時休校が始まった。2月27日（木）の首相要請を受けて、翌28日（金）に市の臨時校長会が朝早くから招集された。そして、3月2日（月）からの臨時休校が決定された。首相要請から休校決定までの早さに、たいへん驚いた。「すぐには休校にならないだろう」と軽く考えていたが、市が前夜の首相要請を「重く受け止めた」とのことであった。現場や市教育委員会の判断よりも、市の判断が優先された形である。

休校決定の日は、たいへんな状況になった。休校中の学習の準備と子どもたちへの説明、保護者への連絡など、突然の対応に追われた。子どもたちは、首相要請をニュースで知っており、朝から「もう休校になっちゃうかな」と尋ねてきた。申し訳なかったのは、6年生である。3月の第1週に卒業行事が集中していた。そのため、楽しみにしていた「卒業セレクト給食」や「6年生を送る会」、実行委員が準備していた「卒業レクリエーション」など、予定していた行事が中止になった。「休校があと数日遅かったら」と考えてしまう。6年生は、本当に残念がっていた。また、卒業式は、卒業生、保護者、職員のみで参加して開催した。休校で子どもたちがいなかったため、職員で準備を進めた。「卒業式ができないと思いました」と話す保護者も多く、開催できてとにかくほっとした。修了式は「3密」回避のために校内放送で行い、短時間ですむようにした。

新年度の始業式や入学式も、縮小して実施した。しかし、臨時休校が延長となった。勤務校では、市の方針で、休校中も8時30分から14時30分まで「児童預かり」を行っていた。その後は、普段の児童クラブに引き継がれた。開始当初は、80名程度の児童の登録があった。しかし、保護者の在宅勤務や休業も増え、5月の時点で30名程度に減った。各家庭には定期的に電話連絡を行い、子どもの生活や学習の様子を確認してきた。5月の連休明けからは、週1度の家庭訪問を実施した。「3密」を避けるための在宅勤務は、さほど進まず、1週間に1日程度であった。

5月25日（月）からは、分散登校が開始された。分散登校は、6月5日（金）までの2週間（10日間）実施された。子どもたちが住んでいる地域をA地区とB地区に分割して1日おきに登校する方式で実施した。分散登校中は、3時間授業で昼前に下校した。

6月8日（月）からは、通常登校が始まった。しかし、給食は、前向きの座席配置のまま、静かに食事をしている（現在もその状態）。献立も「ご飯+おかず一品と牛乳」で、すぐに食べ終わった（7月からは通常の献立に戻った）。

教室の座席は、机と机の間を空けて、人との距離を保つようにしている。グループやペアでの学習は最初は「自粛」し、現在では、机を少し空けた形でグループやペアの学習を行っている。学校行事は、「自粛」の連続である。泊を伴う宿泊学習や修学旅行は、日帰りの校外学習に変更になった。勤務校では、10月から遠足などの行事を行っている。近隣の中学校では、京都・奈良方面の修学旅行は実施せず、県内の日帰り校外学習を実施するところが多いようである。運動会は実施するが、半日（2時間程度）の縮小版で行う。市音楽会、市文化祭（絵画や習字の作品展示）、市の祭りのパレードなどの市の行事は、ほとんどが中止になった。

全国学力調査や県学力診断テストなどのテストはそれぞれ中止になった。例年、結果をもとに学力向上の計画や報告文書などを作成する指示が県や市からあったが、今年度はなくなった。

夏休みは2週間であった。短かったので、子どもも職員もがっかりであった。勤務校では、夏休み中は、会議や研修などは一切行わなかった。

このように、例年と学校生活が異なるので、子どもたちも不満やストレスなどがあるようである。また、休校や自粛生活で家庭にいる時間が多くなり、それに伴って生活の様子も変わってきたようである。今回は、授業に出ている6年生の子どもたちに夏休み明けに書いてもらった作文をもとに、コロナ禍の中で子どもたちがどのように生活し、何を考えているのかを報告したい。

2 作文を読む

① 楽しい生活からの絶望

S・H

私は、臨時休校期間中、何もすることがなくてすごくひまでした。休校だったけど、夏休みや冬休みとちがい、どこにも行けないので、ほとんどずっと家にいました。

お父さんは、いつも東京に仕事に行っていたけど、コロナウイルスのえいきょうで、テレワークでの仕事が多かったので、休校中おとうさんは畑で野菜を育てたり、いっしょにネットショッピングなどをしました。友達とラインや DM をしていましたが、学校に行きたがっている友達もいました。ですが、私は休校中の生活が楽しかったので、あまり学校に行きたいと思いませんでした。なので、分散登校のお知らせが来たとき、絶望しました。

約3か月ぶりに学校に行く日の朝は、とてもゆううつで、帰ってからは、とてもつかれていたの、すぐねました。もしまた休校になったら、前よりも楽しもうと思いました。

② 最悪だった日々

S・Y

わたしは、休校中との間と夏休みにとてもがっかりしたことがあります。それは、家で自由の時間が出来るはずだったのに、それがほとんど出来なくなってしまったことです。家にはお姉ちゃんがあります。でも、お姉ちゃんは、お昼になるまで2階にいたので、ほとんどの時間ゆっくりすることができました。

でも、きゅうにお父さんがざいたくきんむになったので、わたしの自由の時間は、ほとんどなくなりました。しかも、お父さんは散歩に行こう、としつこく言ってきました。あと、わたしが好きな番組を見ていると、「これってそんなにおもしろい？」と聞いてきたり、「また同じ番組見ているの？」とあきれたように言われたりして、とてもいらいらしました。とても楽しい日々になると思っていたのに、あまり実現させることが出来なくて、とてもがっかりしました。

③ 休校中の課題自粛要請

K・T

学校がコロナで自粛になった時、ぼくたち生徒はいろんな課題をもらいました。友達とも会えず、外には行けず、淡々と宿題をこなす日々。ある時、ぼくはこう思いました。「先生、課題は自粛しないんですか？」

こう思うたび、課題のやる気をなくしていました。今では、そんなことはなく、友達とも会えます。外へも行けます。今まで当たり前だったことが、できなくなってぼくは改めてこう思いました。当たり前のことが当たり前になることがどれだけ幸せかを。これからもこういうことがあるかもしれません。でも、それに対してこれからは一緒に付き合わなければいけない時代になりました。まだまだ感染予防をしっかりと、予防をしていきたいと思います。

④ コロナ最悪

S・Y

休校中最悪だったことは、どこにも行けなくなって、ものすごくストレスがたまったことです。なのに、じゅくだけは休みじゃなく、朝から行くんです。最悪です。ゲームをやっていたけど、あきました。最悪です。

休校中最高だったことは、じゅくがオンラインになったことです。じゅくがオンラインになってタブレットでやっていました。タブレットのカメラのうつるところを調節して、手元をうつらなくしました。よって、メモをとっているように見せかけて、絵をかいていました。超楽でした。でも、そのオンラインは、たったの4回しかやりませんでした。やっぱり最悪でした。

⑤ 夏休みは自由にしてもいいだろ

H・H

夏休みは、1日のほとんどゲームをしていました。あまりにも楽しかったので、大声をあげてしまったら、姉におこられました。そして、夜は2時に寝て、11時に起きて、昼ごはんを食べてゲームをして、夜ご飯を食べて夜ふかししてのくり返しでした。いつもは忙しくてつかれるので、たまには自由にしたいと思い、自由に過ごしました。

⑥ コロナのせいでマスク生活

T・M

コロナの対策でマスクで学校に通っています。6月、7月はマスクをつけていても、そんなに気にしませんでした。けれど、夏休みが終わって学校に行くと、教室やろう下がすごく暑く、マスクを外したくなりました。けど、コロナの対策をしっかりとだめなので、マスクは外しませんでした。私は、朝車で学校に来ています。なので、そんなにのどがかわかないと思っていました。けど、校舎の中が暑いので、のどがすぐかわきます。しかも、6年生の教室は4階なので、階段でもつかれます。なので、私は毎日手を洗い教室に入ったらお茶を飲みます。マスクをしていると暑いので、私は水とうを飲むのが楽しみです。水とうのふたを開けると冷たいひやひやした空気が少し来るので、それが毎日学校に来たときの楽しみの一つです。

3 作文を読んで

日頃、忙しい子どもたちにとって臨時休校は、自分のペースで生活できるチャンスでもあったようである。しかし、「外出できない」、「友達にも会えない」、「学校の課題が多く自分の力で進めなくてはいけない」、「暑いのにマスクをする」、「久しぶりに学校に行くと疲れる」など、ストレスに感じることも多い様子が伝わってきた。

また、学校は休校でも、塾はやっていたところもあったようで、オンラインで学習する機会もあったようである。しかし、④のように、「タブレットのカメラのうつるところを調節して、手元をうつらなく」するなど、興味をもてない子もいた様子が見られる。現在、第2波に備えて公立学校もオンライン環境を整備しているが、改めて「学びとは何か」という根本的な問いについて考える必要性を感じた。

臨時休校中や夏休み中の生活について聞くとネットの「ゲーム」、Youtube のような「動画」の話がほとんどである。⑤のように生活リズムが明らかに乱れている子も見られる。また、ネットのゲームでのトラブルに関する相談もあった。家庭にいる時間が増えると、その時間を有効につかえる子ばかりではない様子が見えてきた。

①や②のように、テレワークする父親のエピソードが書かれていた作文が見られた。きっと普段は職場からの帰宅が遅いのでしょう。家庭にいることでいつもと違うコミュニケーションの様子が伝わってきた。こういうときだからこそ、働き方について考える必要も感じた。

そして、学校の役割の重要性を再認識した。オンラインではない生の授業での学びのよさ、友達がいるなかで学ぶことのよさなど、学校の重要性を確認していく必要がある。



あこがれのジャイアンと過ごす日々

——うちのクラスの“こころのとも”たち

県立特別支援学校教諭 小林秀行

*登場する子どもの名前はすべて仮名です。また、子どもの実態などについて意図的に事実と異なる加工を加えている部分もあります。

1 はじめに

今年はふたたびもちあがって小学部6年生を受け持つことになりました。私は4年生から受け持っているので、かなり思い入れもあり、漠然と「もう1年できたらいいなあ」「卒業までもてたら…」などと思ってはいましたが、思いが通じたのかは分かりませんが、あと1年一緒に過ごすことができるようになりました。

しかしながら、世の中ではコロナが蔓延していて、4月、5月はほぼ休校、6月も大半は分散登校ということで、1学期は実質6月下旬から8月上旬の1ヶ月強という学校生活でした。当然のことながら誰もが経験したことのないような事態で、私たちも戸惑うことや不安なことなどもありました。ただその一方で子どもたちと過ごす日常のありがたみについても本当に考えさせられたように思います。今後、このコロナ禍がどのようにっていくのか見通しもありますが、誰もが思うことでしょうが、はやく「当たり前の日常」が取り戻されることを願うばかりです。

さて、そんな中でも新年度の学校生活はスタートしていますが、前にも書いたとおり、私もこの学年は3年目になるとはいえ、クラスとしては初めて受け持つ子も半分(3人)います。その中にはこれまでも同じ学年にいて、国語・算数などのグループも一緒にやっていたとは言っても、クラスで一緒に過ごしてみないと分からない部分が多いことも改めて実感します。また、唯一はるきくんは4年生からずっとクラスで一緒ですが、クラスの構成メンバーによっても微妙に昨年度とは違うこともあります。一方でしゅうとくんなど私もはじめて受け持つ子で、昨年度までもほぼかかわりがなかったような子もいて、繰り返しますが3年目とは言ってもまったく違う刺激ばかりで、日々悩むことや考えること、あるいは喜びなどに満ちた毎日でもあります。新しく私のクラスになった6名の子どもたちとの1学期の日々の様子から思うことをまとめてみました。

2 新しいメンバーとの日々 ～トラブルばかりのスタート～

(1) しゅうとくんと“出会い”

しゅうとくんとはこれまでの2年間で私ともかかわりは少なかったように思います。同じ学年にいればそれがまったくないわけではありませんが、彼もわざわざ他クラスの先生にかかわりを求めていくようなタイプではないこともあって、私とも深いつきあいはありませんでした。

昨年も学年での情報共有の中で、デイサービスなどで刃物のようなものを出してきたことが話題に上がっていましたが、学校でそのようなことをするわけではないので、特性の一つとして頭に入れておくくらいにしていました。

実際彼と一緒に過ごしてみると、昨年度まで断片的ですがかかわる中で私が抱いていた「自分の言いたいことだけを一方的に話し、こちらの伝えたいことはほぼ伝わらない」という印象を改めて感じました。しかし、一方ではこれから同じクラスでいいことも悪いこともひっくるめて一緒に過ごしていく中で、そのあたりはどこまで改善していけるかは未知数ではあるものの、自然と変わっていく部分ではないかとも、これまでの私の経験も踏まえても感じました。

私がクラスで受け持つのは3年連続となるはるきくん（よく頑固になってしまいますが、愛嬌たっぷりのどこか憎めない子です）…この二人の関係は私が学年にいた4年生、5年生の間はあまりなかったように思います。特別「相性が悪い」という感じもありませんでした（今思えば、ただかかわる場面がなかったというだけのことでしょうが…）。ところがいざ蓋を開けてみると、しゅうとくんは何かにつけはるきくんを攻撃のターゲットにします。わざわざ近づいて行って、はるきくんを刺激するようなことを口にしたたり、時には教師の目を盗んでハサミなどを背中に隠しもって近づいていったり、6月下旬の本格再開後の1週間はクラス3人の担当教師でも、「ちょっと手に負えない…」という空気も出はじめていました。そう思わせる要因はこの二人の関係性の問題ももちろんあるのですが、このしゅうとくんに対しては何を話しても通じている感じがしないこともありました。

そこで、授業時間以外はしゅうとくんを別のクラスで過ごさせるなどの案も出されました。ただ、そのあたりはもう少しクラスの中で様子を見て、一定期間クラスとして「やるだけのことをやって、それでもダメなら」学年全体として考える方向で進めることにしました。

3年連続で学年を持ち上がって来た私にとっては、ずっと同じクラスでもっているはるきくんと付き合いは3年目になります。彼とはお互いの関係性もそれなりにはあります。でも一方でしゅうとくんは前にも書いたようにはじめでもつ上に関係もほぼできていません。これから関係をつくっていく子です。彼にとっても少なからず、新しい環境で…と期待感をもっている面も感じていました。こちらにとってはそんな意図はまったくないにしても、彼が「見放された…」と思うようなことは避けなければと考えました。

(2) よいところを見つけ、大きくしていけば…

当初はすでに述べたようなことから不安もあったものの、希望が持てる面も確かに感じていました。しゅうとくんはちょっとした仕事をやりたい気持ちが強く、たとえば、各家庭に配布するお手紙を黒板のところに貼っておくと、「それやりたい…」と自分から引き受けてやってくれることもよくありました（私はあえて、その日の配布物をポンと黒板に貼っておくだけにしておくこともあります。気がついてやってくれることを期待してのことです）。

やれば、自然に周りから褒められたりします。彼自身だって「役に立つ自分」を確かに感じる事ができ、誇らしい気持ちにもなります。他にも係の仕事となっている「健康観察カード」の仕事では、毎朝の出席状況を自分で確認して、鉛筆で「出席」「欠席」「遅刻」などと記入し、現在はコロナ対策として学部主事が各教室を回ってカードを集めに来ますが、学部主事に自分の手で渡すと

ころまでやってくれています。その他、ちょっとした仕事も私と一緒に多々やってくれました。

もちろんクラスの他の先生たちも信頼関係をつくるべく丁寧にかかわってくださり、1週間、また1週間、さらに1週間・日を追うごとに明らかに表情も良くなっていきました。その中では前にも述べたような“問題”も相変わらずありましたが、それに対してこちらが話をしても彼の受け止めは全く変わってきました。つくづく子どものことはまずは受け止め、そこからいねいにいねいに信頼関係を積み重ねていくことが大切だなあと再確認しました。その意味ではこれからが(2学期以降が)本当の信頼関係になっていくかの勝負どころだと考えています。

また、一方では私はこんなことも考えていました。このしゅうとくんとかかわっていて強く感じることは、“問題”や“欠点”を正すことに躍起になることより、“よい部分”をどんどん見つけて、大きくしていくほうが特に大事ではないかということです。そうしていけば相対的に“問題”が小さくなっていき、やがてはあまり目につかなくなっていくのではないかと。仮に問題自体はそのままで大きかったとしても、よいところで溢れさせてしまえば、やがては自分で「よりよい自分になる道」をちょっとでも選んでくれるのではないかと考えています。だからこそ、今できることは目の前で成果をあげようと必死になることよりも、長い目で、おおらかにみて、たっぷりと“心の栄養”を注いであげることではないかと思えます。

(3) 心をつなぐジャイアンが存在

はるきくんとこのしゅうとくんの関係で困っていたころ、本当にいろいろなことを考えました。余談ですが、こういう時こそ教師として成長するのですね(実際、ここで私が成長したのかは分かりませんが・・・「成長するきっかけに恵まれた」というくらいにしておきましょう(笑))。ふだんのうまくいっているときやそれほど考えなくても問題が起こらないような時は本当の意味では考えることをしないのかもしれませんが。こういう状況だからこそ、考え抜くことでいろいろなアイデアが出てくることも改めて学びました。まさに「ピンチこそチャンス」です。

クラスの先生の発案で、リラックスする時間をとり、ゆったりとした音楽をかけながら、呼吸法を学ぶことでしゅうとくんにとっても多少、気持ちの落ち着きにつながったり、給食の時間にはオルゴールの曲をかけたり、気持ちがゆったりできるようにしてみたこともありました。こういう状況になれば私もまったく考えないことで、とても学ぶことが多い時期でした。

さて、話は戻りますが、はるきくんは4年生からずっと見ていると、好きなものや口にするフレーズなどにブームがあり、どんどん変遷してきました。6年生になるとたびたびドラえもんに出てくる「ジャイアン」のことを口にしていたり、ジャイアンのしゃべり方をマネしているような場面がみられました。それを活かしてはるきくんとかかわっていると、実はしゅうとくんもジャイアンのことが好きなことが分かってきました。

年度はじめの係決めの中ではるきくんが学級委員に決まっていたのですが、その後の生活でよくよく見ていると、しゅうとくんははるきくんに対しての「ライバル心」や「妬み(?)」もあったのか、学

級委員もやりたそうにしていました。そのため、ある時から一日交代で学級委員をやるようにしてみました（この頃は、学校の本格再開後の1、2週間くらいの時期で、はるきくんが同じ教室にいることでしゅうとくんもなかなか落ち着くことができず、クラスの中も悪循環になっていました）。

学級委員を務めるはるきくんやしゅうとくんに「どうしたらこのクラスがいいクラスになるかなあ？」などと投げかけたり、その日にはるきくんがよくやってくると「明日はしゅうとくんね!」「はるきくんにまけないようにね!」などといい部分で競わせるような言葉をかけたこともありました。「どっちがいい“ジャイアン”になれるかな!」などと本人たちが“あこがれ”に思うキャラクターの名前を出すと、ほんの一瞬かもしれませんが、2人の目は輝き、2人で肩を組んで「お〜れ〜はじゃいあん…が〜きだいしょう〜♪」と歌っている姿も時には見られます（そのあと、それこそ「3歩あるいたら」忘れていざこざを起こしていることもあるのですが…）。たとえほんの一瞬で消え去ってしまう出来事かもしれませんが、こんな小さな小さな芽を見つけて辛抱強く育てていくのが私たちの仕事なのかもしれません。

この2人の関係はその後、問題があったり、こんなよいこともあったり、その繰り返しですが、本当にゆったりとですが、クラスも安定して回っていくようにはなっています。このあとも相変わらずいざこざがあったりもするのでしょうが、そこからどれだけのことを学ばせてやれるか、そして、それを彼らの成長につなげていけるかが大切ではないかと思っています。

(4) 長い目で指導

最近、「長い目でみること」「大目にみてやること」といった教育では本来大切なことがしにくくなっているように感じています。言葉をかえると、いろいろな面でなんか窮屈な感じがします。その原因としていくつか心当たりはあります。

私が現在うけもっているのは6年生ということで、いわゆる“思春期の入り口”にあります。実際に体も心も変化がそれぞれに見られはじまっています。

前にも書いたように年度当初、こちらの思いが届きにくいしゅうとくんのことをクラスの先生たちで話していて、他の先生から「今の彼には将来（高等部卒業後）の進路がどうか、なんてことよりも、人への信頼感を育てることのほうがよっぽど大切じゃないか…」という話が出ました。

今の特別支援学校という場所は社会に送り出す直前である「高等部」という場所がまず中心にあって、そこにどうつなげるのか、という視点で中学部があり、さらにそこにどうつなげるのか、ということに小学部の教育も矮小化してきているように感じます。そんな中では特に「小学部6年生」という年代をどう捉えて、どう過ごせるようにするのはすごく大事なことでないかと感じます。

このしゅうとくんのことも高等部でどう過ごすか、進路先でどう過ごすかという出発点でものを考えれば、すべて「今のうちにどうにかしなくてはいけない」という発想になります。でも、「今」「目の前」の「しゅうとくん」を見ていれば、そんなことよりもまずは人への信頼感を丁寧に育てていかないことには、その先のことも身につけていかないと感じます。

6年生だからこそ、ちょっと立ち戻って、5年生で、あるいは4年生で、3年生で大切にしてきたことを“たしかなもの”にした上で中学部に進ませてあげたほうがよいのではないかと考えています。それぞれの子どもが今身につけつつある力が「本当の力」になっていないうちに、次から次へと求めたり、うわべだけをしっかりとさせようとしても、おそらくこれから先どこかでひずみがでるように感じるからです。今こそもっと「ヨコの発達」の視点を大切に考えていきたいと最近思います。

1学期の最後にクラスで「おたのしみ会」を行いました。(今年はこのような楽しいことも密を避けるためにクラスで行うことが多いのです)サッカーのPK合戦のようなゲームをクラスで行い、その時にしゅうとくんはシュートはずしつづけ(決してダジャレではありません!)、気持ちが乱れてしまい、はるきくんたちに“八つ当たり”をはじめ、せっかくのおたのしみ会がめちゃくちゃになってしまいました。

本人も気持ちの整理がつかなくなり、「〇〇がわるい」などと全然関係ないことを言い訳にしはじめてしまいました(こういうことはふだんから彼にはしばしばあることです)。よく話をした上で、「このあとどうしたら友達が納得するか」「みんなできもちよく再開できるか」考えさせて、自ら「みんなにあやまる」と自分から口にして、みんなに謝りました。

そのあと、私も「しっばいすることはだれにでもある」「いま、じぶんがやってしまったことでまわりはどうおもったか、これからかんがえていこう」という話をしました。これからもこういうことの繰り返しだと思えます。6年生のうちにそういうことが完全になくなって・・ということも考えにくいと思えます。(もし見た目になくなったとしても、おそらくそれは不自然でしょう)だからこそ、本当に長い目で、彼にとって大切なことを伝え続けていきたいと思っています。

(5) 現場の主体性～目の前の子どもの事実から出発するということ～

うちのクラスではこんな感じで日々過ごしています。もちろんその指導に対しては悩んだり、これでいいのか、という思いの繰り返しです。それは昨年だって、その前だって同じです。私はこれまでの経験からうまくいったことも失敗したことも含めて、よくいう「ビシッと」指導する、しっかりさせる、ということよりももっと大切にしたいことがあります。このクラスの集団の特性を考えると、これまで述べてきたしゅうとくんとはるきくんの関係性があり(はるきくんは誰かが注意されている場面が苦手、それだけで心をかたくなにしまいます)、そこに時々人のことが気になってしまうまことくんが絡んでくることがあります。さらには教室の雰囲気が悪くなると、強く不安感を感じてしまうひなたくんもいます(実際、数年前にはそういうことで不登校気味になってしまったことがあったようです)。

だからこそ、よくないことをしている時の伝え方にはかなり気を配る必要もあるのです。でも、そういう環境だからこそ、どう伝えたらもっとも本人に届きやすいのか、周りに与える影響を小さくできるのかもその都度考え、クラスの先生たちでもちょっとつかみつつあるということもまた事実です。

私も厳しさが必要ではないとは思っていません。どういう場面で、どういう気持ちで使うかが大切なことだとは思っています。うちのクラスを表面的にだけ見れば、「メリハリがない」「厳しさももっと必要」と思う人も今の学校現場を考えればいても不思議ではないでしょう。私自身は前にも述べたよ

うに日々自分のやっていることには疑問もいくつかもちながらの指導ではありますが、その場その場で「ベター」だと思えることはやっているつもりです。でもそれは現場で子どもたちとかかわる人間であればおそらく誰だってそうではないのでしょうか？ 周りが言うことや“上からの方針”よりも、現場感覚を大切に考えていきたいと思います。でないとどこかおかしいことが必ず出てくると感じています。

子どもたちの姿から考えて、現場で実際に起こっていることから話し合っ、そして自分を信じて実践していきたいと思います。

ちょっと息抜きに… どうしたらより相手に伝わるか…

私は子どもたちに何かを伝えるとき、いろいろな工夫をしています。伝えたとしても、伝わっていないのなら、教師として伝えたことにはならないし、ましてそれで伝わらなかった相手のせいにするのは恥ずかしいことという思いもあります。だからこそ、頭で理解させることより、心にどう届くのかを考えるようにしています。その相手や状況に合わせて、やんわり伝えたり、ちょっとハツパをかけるように伝えたり、あるいはユーモアを混ぜて話したり、時には真っ直ぐに思ったことを伝えたり…それこそ場合によってはイタズラをとおして…本当にいろいろです。

今年のクラスは前にも書いているように、「自分のことだけを一方的に話して、他人の話が聞けない」しゅうとくんや心をかたくなにしてしまうとなかなかこちらの思いも届きにくくなるはるきくんがいます。2人ともジャイアンが好きなので、私が言いたいことをジャイアンに言わせてみました。どういうことかという、黒板にジャイアンのイラストを貼って、その横に吹き出しをつくり、「まいにち、しごとをありがとう」などと書いておくと、あこがれのジャイアンから言われたことなので、スーッと心に入っていきそうです。そういう時は、体の動きが明らかに違いますね（私たちだってそうですよね。心に届いたことはスッと動けるものです）。

また、国語・算数に苦手意識が強いしゅうとくんには「ジャイアンはこくごがにがてみたいだから、しっかりべんきょうして、ジャイアンにおしえてやったら？」と伝えたこともありました。

友達同士の温かなかわりが見られた時などには、ジャイアンのセリフ「心の友よ!!」をまねして、「こころのともだ！」と伝えることもあります。実際にそのフレーズを介して関係を深めているように感じます。

一方ではるきくんのお母さんからは最近ジャイアンになりきりすぎて家で口が悪くて困っているとされたこともありました。もちろん保護者の声や困っていることにはしっかりと耳を傾けますが、私がジャイアンをとおして伝えたいことは「気は優しくて力持ち」ということで、そんなところをはるきくんにもしゅうとくんにもお互いのかかわりをとおして少しでも学んでほしいのです。

子どもたちは“いざ”という時にはその先生の言葉で、ごまかさずに向き合ってくれることを求めていると思います。そんな時はいつでもしっかりと向き合うつもりではいますが、特にこのクラスはふだんはこんな感じであこがれの存在から言ってもらったり、そんな存在が口にするセリフを有効に使うことで、楽しい雰囲気やまはつってやることも大切ではないかここ数ヶ月で実感しています。

3 新学習指導要領となって～私たちの働き方を考える～

数年くらい前からでしょうか？ 授業の学習指導案を書くときにその授業や指導の根拠として「学習指導要領のどこに書かれてあるのか」を明示するように求められるようになってきました。年々その風潮は強まってきていて、下手をすると誰も何も言っていないのに、現場の人間が「こういうことをやりたいのに、どうせ“指導”が入るから…」と“勝手”に諦めてしまっているようなことも感じます（ちなみに私はそういう現象を最近「現場人としての“不戦敗”」ではないかと考えて、自分自身と向き合うようにしています）。

私は学習指導要領も含めて、“上からくるもの”とは、どう付き合うのかが大切だと思っています。無条件に、無批判に一方的に従うのはどうかと思いますが、かといって、こちらが一方的に批判的であったり、無視をすればいいということでもないと思っています。

“主体的に”自分でよく考えて、判断して、取捨選択していくことがいちばん大切なことではないでしょうか？ ただ、そのためには上の立場の人間と現場の人間が“望ましいやり方”を間に挟んであくまでも五分五分で意見を交わせる環境がまずはあることが、不可欠ではないかと考えています。

私の身の周りで起こっていることも含めて最近の教育現場で起こるいろいろな問題は私が思うにそのあたりに根があるのではないかと感じています。そのバランスが崩れることによって、私たち現場の人間は自分たちのやること（日々の指導や授業、あるいは仕事全般）にやりがいや誇りがもてなくなったり、ひいては“やらされ感”が強まっていっているように思います。組織にいれば完全に自分が思うようにはいかないし、その時にどういられるのかも当然大切なことだとは思いますが、トップダウンではなく、上から下へ、あるいは下から上へ「行ったり来たり」しながらのんびりと決めていく“プロセス”があるのかないのか、それによってぜんぜん違うように思います。

新学習指導要領にはこのように謳われています。

「主体的で対話的な深い学び」

子どもの指導について言っていることではあります。しかし…私たち教師に主体性もないのに、どうやって子どもたちの主体性を考えることができるのだろうか？ トップダウンで降りてくることに従うだけで、どうして周りとの建設的な対話が生まれるのか、あるいは自分でよく考えて、試行錯誤を繰り返しながら自分のものにしていく“深い学び”ができるのか…「指導要領の何ページにこれこれ書かれているから…」などということよりも前に、このことをもっとよく考えることがいちばん大切ではないかと私は思います。

そんな状況の中で、現場に生きる人間としてどうするべきか…何も上からくるものをすべて批判したり、ぶつかったりということではなく、まずは勝手に「たたかいを放棄しないこと」だと思います。

小さな行動の積み重ねの中でどこかに突破口はあると思います。それをしないとただ言われただけのことをするようなことをそれぞれ“勝手に”認めて、その中で苦痛を感じながら仕事をするだけになってしまいます。周りの環境のせいではなく、実は答えは自分自身の中にあるのかもしれない。

4 おわりに

今年の夏休みはおよそ2週間ということで、誰もがはじめての経験でした。毎年の流れを知っているほど、気持ちの切り替えなどが難しく感じます。2学期以降のこともみとおしがもてない面が大きく、子どもたちにとってもそうですが、先生たちにとっても難しい日々になりそうです。

私も4年生、5年生ともちあがってきての6年生ですので、小学部最後の一年間がこのようなかたちになっていることが残念でもありますが、その中でできることを考えていくしかないかなと思っています。

クラスのマことくんは日程変更が苦手な子ですが、この変則な日程での生活でも大きく崩れることなく過ごすことができています。まさにこれまでの積み重ねの大切さを感じます。また、この日々は子どもたちにとっても負担が大きかったり、行事の中止や削減、縮小など残念なことがあるのも事実ですが、この経験がのちのち生かされるようにできたらと思います。

今回のレポートでは、新しくクラスで受け持っているしゅうとくんとはるきくんの関係を中心に描いてみました。他にもすぐ前に書いたまことくんや癒しの存在のひなたくん、あるいは4年生の時以来うけもつりえさんや一緒にいるほどに可愛さを感じるゆきちゃんたちがいます。6人でのこれからの日々が改めて貴重に思えます。その日々をとおして大切なことを考えていけたらと思います。

